

記号	活用の種類	品詞	基本形	活用形
コ				
ケ				
ク				
キ				
カ				
オ				
エ				
ウ				
イ				
ア				

二 次の古文の傍線部ア～コの形容詞、形容動詞についてそれぞれ解答欄の文法的な説明を完成せよ。ただし、全く同じ説明となるものについては同じ記号を付けてある。

ア ありがたきもの、舅に褒めらるる婿。また、姑に思はるる嫁の君。  
 毛のよく抜くる銀の毛抜き。主そしらぬ従者。  
 つゆの癖イなき。かたち、心、ありさますぐれ、世に経るほど、いささかのきずイなき。ウ同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかの隙工なく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそオかたけれ。  
 物語、集など書き写すに、本に墨つけぬ。カよき草子などは、キいみじう心して書けど、必ずこそク汚げになるめれ。  
 男女をばいはじ、女ども、契りケ深くて語らふ人の、末までなかカよき人コかたし。

### 三 おわりに

文法を学ぶ目的は文法を覚えることではない。文法を活用し、古文、漢文を読み、親しみ、味わうことこそが本来の目的である。「古典嫌い」を生むことがそうした道筋から大きく外れていることは言うまでもない。文語文法を学ぶ上で必要のない負担感をいかに軽減するか、生徒や学生の立場に立って考え、工夫を凝らし、アイデアを出していきたい。冒頭にも述べたように次回は助動詞や助詞、敬語法の学習の指導についての実践報告をしたいと考えている。

《ワークシート三》

教職基礎ゼミナーⅣ No.12

『枕草子』「ありがたきもの」用言の確認

日本語学科二年 氏名 ( )

一 次の古文の傍線部ア～テの動詞について解答欄の文法的な説明を完成せよ。活用の種類は活用する行が分かるように記すこと。

ありがたきもの、舅にア褒めらるる婿。また、姑にイ思はるる嫁の君。毛のよくウ抜くる銀の毛抜き。主エそしらぬ従者。

つゆの癖なき。かたち、心、ありさまオすぐれ、世に力経るほど、いささかのきずなき。同じ所にキ住む人の、かたみにク恥ぢケかはし、いささかの隙なくコ用意したりとサ思ふが、つひにシ見えぬこそかたけれ。

物語、集などス書き写すに、本に墨セつけぬ。よき草子などは、いみじうソ心してタ書けど、必ずこそ汚げにチなるめれ。

男女をばツイはじ、女ども、契り深くてテ調らふ人の、末までなかよき人かたし。

記号	活用の種類	品詞	基本形	活用形
オ		動詞		
エ		動詞		
ウ		動詞		
イ		動詞		
ア		動詞		

記号	活用の種類	品詞	基本形	活用形
テ		動詞		
ツ		動詞		
チ		動詞		
タ		動詞		
ソ		動詞		
セ		動詞		
ス		動詞		
シ		動詞		
サ		動詞		
コ		動詞		
ケ		動詞		
ク		動詞		
キ		動詞		
力		動詞		

〈裏に続く〉

記号	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
II	I	イ	ア						

二十一日に、和泉国までと、イ平らかに願立つ。藤原のときさね、船路なれど馬のはなむけす。上中下、酔ひ飽きて、いとIIあやしく、潮海のほとりにてあざれ合へり。

ある人、県の四年五年果てて、例の事どもみなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろよく比べつる人々なむ、別れI難く思ひて、日しきりにとかくしつ、ののしるうちに夜更けぬ。

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。  
 その年の、十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に、門出す。そのよし、アいささかにももの書きつく。

二次の古文の傍線部ア、イの形容動詞、二重傍線部I、IIの形容詞についてそれぞれの活用表を完成せよ。

※濁音の行かめるよ(て)に注意せよ。

バ行	ダ行	ザ行	ガ行	ワ行	ラ行	ヤ行	マ行	ハ行	ナ行	タ行	サ行	カ行	ア行	
ば	だ	ざ	が	わ	ら	や	ま	は	な	た	さ	か	あ	ア段
び	ぢ	じ	ぎ	ゐ	り	い	み	ひ	に	ち	し	き	い	イ段
ぶ	づ	ず	ぐ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く	う	ウ段
ぶ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	エ段
ぼ	ど	ぞ	ご	を	ろ	よ	も	ほ	の	と	そ	こ	お	オ段

《参考》五十音表

《ワークシート二》

教職基礎ゼミナーⅢNo.9

『土佐日記』馬のはなむけ 用言の確認

日本語学科二年 氏名 ( )

一 次の古文の傍線部ア、クの動詞についてそれぞれ後の活用表を完成せよ。活用の種類は活用する行が分かるように記すこと。同じ動詞には同じ記号を付している。

男もアすなる日記とイいふものを、女もアしてウみむとて、アするなり。その年の、十二月の二十日あまり一日の日の戌の時に、門出アす。そのよし、いささかにもにエ書きつく。

ある人、県の四年五年才果てて、例の事どもみなアし力終へて、解由などキ取りて、ク住む館よりケ出でて、船にコ乗るべき所へサ渡る。かれこれ、シ知るシ知らぬ、送りアす。年ごろよくス比べつる人々なむ、セ別れ難くソ思ひて、日しきりにとかくアしつつ、タののしるうちに夜チ更けぬ。

二十二日に、和泉国までと、平らかに願ツ立つ。藤原のときざね、船路なれど馬のはなむけアす。上中下、テ酔ひと飽きて、いとあやしく、潮海のほとりにてナあされニ合へり。

記号	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
オ									
エ									
ウ									
イ									
ア									

記号	基本形	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
ニ									
ナ									
ト									
テ									
ツ									
チ									
タ									
ソ									
セ									
ス									
シ									
サ									
コ									
ケ									
ク									
キ									
カ									

〈裏に続く〉

《ワークシートⅢ》  
教職基礎ゼミナールⅢ No. 5

文語用言実力確認小テスト

日本語学科二年 氏名 ( )

1 次の文語動詞の活用表を完成せよ。活用の種類は何行の活用が分かるように記すこと。

番号	語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
①	言ふ								
②	過ぐ								
③	眺む								
④	見る								
⑤	眺る								
⑥	来								
⑦	す								
⑧	死ぬ								
⑨	あり								

〈裏に続く〉

1 次の文語形容詞の活用表を完成せよ。

番号	語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
⑩	遠し								
⑪	あやし								

2 次の文語形動詞の活用表を完成せよ。

番号	語	語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形	活用の種類
⑫	清らなり								
⑬	堂々たり								

※解答は楷書で丁寧に書くこと。

(三) 活用の仕方の覚え方

ク活用の活用のみを覚え、シク活用は終止形以外の活用形の上に「し」が付くだけと覚えればよい。活用表の左側はラ変と同じ活用をしている。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	く	く	し	き	けれ	かれ
	から	かり		かる		

(四) 活用の種類の見分け方

活用の種類の識別については、終止形以外に活用している場合は、「し」が残ったまま活用していればシク活用、残っていないければク活用と容易に見分けることができる。終止形の場合は動詞の「なる」を下に付けてどう活用するかを考えて識別する。

なし+なる↓なくなる ク活用  
うれし+なる↓うれしくなる シク活用

二・八 形容動詞

(一) 定義

活用する自立語で事物の状態を表し、言い切ると「なり」「たり」で終わる語を「形容動詞」という。

(二) 活用と活用の種類

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ナリ活用	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
タリ活用	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

(三) 活用の仕方の覚え方

基本的にはラ変と同じ活用の仕方をする。連用形に「に」「と」があるのが特徴で、この点を押さえておけばよい。また、活用の種類の識別は見かけからして明らかである。

二・九 用言に係る文法事項を定着させるための試み

ここまでの説明をした上で、古文教材を扱う単元の始めには必ず以下のようなワークシートを用いて用言に係る文法事項の定着を図っている。となく繰り返して確認させることが重要である。

《ワークシート一》は用言の活用について網羅的に確認ができるようにしたものである。文語文法を初めて学ぶのであれば、一とおり用言についての説明を聞いた後に、どれくらい理解できたか、自己評価のために、《ワークシート一》に取り組みせると良い。私は、「教職基礎セミナーⅢ」の講義の中で、復習を目的として、文語文法を扱ったので、単元の冒頭、学生に《ワークシート一》に取り組みせ、予診の評価の材料とした。

《ワークシート二》は実際の古文を題材に用言の文法に関する課題に取り組みせるもので、自身で、品詞を識別し、基本形を考え、活用の種類を見極めて活用表を完成しなければならぬので、《ワークシート一》よりも難易度が上がっており、多くの活用表を書くことで、用言の活用に親しむことになる。

実用的な点に注目して言えば、活用表を書かなければならない局面はほとんどなく、実際に古文の中で用いられている用言について文法的に理解できていればよいわけで、《ワークシート一》《ワークシート二》を経て、最終的には《ワークシート三》に繰り返し取り組みせることになる。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ラ行四段活用	ら	り	る	る	れ	れ
ラ行変格活用	ら	り	り	る	れ	れ

⑤覚えなければならぬ動詞の活用表

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	ア	イ	ウ	ウ	エ	エ
上二段活用	イ	イ	ウ	うる	うれ	イよ
下二段活用	エ	エ	ウ	うる	うれ	エよ
カ行変格活用	こ	き	く	くる	くれ	こよ
ナ行変格活用	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

以上、五種類の活用表さえ覚えてしまえば全ての動詞の活用表を書くことができる。

(四) 活用の種類の見分け方

①次の六種類については語の数が少ないので覚えてしまおう。

上二段活用 着る (カ行)

にる (似る・煮る) (ナ行)

ひる (干る・乾る) (ハ行)

見る (試みる・顧みる・鑑みる等も含む) (マ行)

いる (射る・鋳る) (ヤ行)

ゐる (居る・率る。率ゐる・用ゐるも含む) (ワ行)

※「ヒイキニミて申る」と覚える。

カ行下二段活用 蹴る

カ行変格活用 来

サ行変格活用 す・おはす

ナ行変格活用 死ぬ・往ぬ

ラ行変格活用 あり・をり・はべり・いまそかり

②その他の動詞は打消の助動詞「ず」を付けたときの語尾の変化によって見分ける。

ア段音に活用 ↓ 四段活用

イ段音に活用 ↓ 上二段活用

エ段音に活用 ↓ 下二段活用

③行を見分ける。

四段活用・上二段活用・下二段活用は語尾を見る。

上二段活用は基本的には語頭を見る。

二・七 形容詞

(一) 定義

活用する自立語で事物の状態や存在を表し、言い切ると「し」で終わる語を「形容詞」という。

(二) 活用と活用の種類

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
ク活用	かく	かり	し	かき	けれ	かれ
シク活用	しかく	しかり	し	しかき	しけれ	しかれ

の二つの段で、下二段は下の段エ段とウ段の二つの段で、上二段はイ段一段だけで、下二段はエ段一段だけで活用する。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
四段活用	ア	イ	ウ	ウ	エ	エ
上二段活用	イ	イ	ウ	うる	うれ	イよ
下二段活用	エ	エ	ウ	うる	うれ	エよ
上一段活用	イ	イ	いる	いる	いれ	イよ
カ行下一段活用	け	け	ける	ける	けれ	けよ

② 変格活用

活用の特徴から正格活用に分類できない動詞を変格活用に分類する。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
カ行変格活用	こ	き	く	くる	くれ	こよ
サ行変格活用	せ	し	す	する	すれ	せよ
ナ行変格活用	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
ラ行変格活用	ら	り	り	る	れ	れ

(三) 活用の仕方の覚え方

右の九種類の活用表を覚えて、「ア・イ・ウ・エ」に五十音表の活用する行のそれぞれの段の音を入れ、全ての動詞の活用表を思い出せるようにするというのも構わないが、私は活用の仕方の特徴に注目して、覚えなければならぬ活用表の数をさらに絞り込んでいる。

① 上二段活用と下二段活用

違いは名称の「上」「下」の違いと同様で、上の段イ段音が入る箇所に、下の段エ段音が入っているだけなので、そのことさえ押さえておけば別々

に覚える必要はない。下二段活用の活用を覚えることを勧める。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
上二段活用	イ	イ	ウ	うる	うれ	イよ
下二段活用	エ	エ	ウ	うる	うれ	エよ

② 上一段活用とカ行下一段活用

違いは上二段活用と下二段活用の場合と同様で、上の段イ段音が入る箇所に、カ行の下の段エ段音の「け」が入っているだけなので、そのことさえ押さえておけば別々に覚える必要はない。下二段活用は「蹴る」一語だけでカ行の活用しかないので、上一段活用の活用を覚えることを勧める。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
上一段活用	イ	イ	いる	いる	いれ	イよ
カ行下一段活用	け	け	ける	ける	けれ	けよ

③ サ行変格活用とサ行下二段活用

サ行下二段活用とサ行変格活用の違いは連用形が「せ」ではなく「し」になっているだけなのでそのことさえ押さえておけば別々に覚える必要はない。

活用の種類	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
サ行下二段活用	せ	せ	す	する	すれ	せよ
サ行変格活用	せ	し	す	する	すれ	せよ

④ ラ行変格活用とラ行四段活用

ラ行変格活用とラ行四段活用の違いは終止形が「る」ではなく「り」になっているだけなのでそのことさえ押さえておけば別々に覚える必要はない。



二・三 使用教科書

『高等学校 精選言語文化』（東京書籍）

二・四 文語文法に係る用語の確認

具体的な用言の文法事項の説明に入る前に基本的な用語の定義について確認をしておくことが重要である。これらが定着していないとその後説明が全て無意味なものとなってしまふ。確認しておきたい主な用語は次のとおりである。

(一) 品詞

性質や特徴によって分類された言葉の最小単位。単語。語。

(二) 活用

用いられる場合によって語の形が変化すること。

(三) 活用形

活用して変化した語の形。用いられる場合や働きによって、次の六つに分類されている

未然形 連用形 終止形 連体形 已然形 命令形

「連用形」は代表的な働きが用言の連なる形だから連用形という。「連体形」は代表的な働きが体言の連なる形だから連体形という。

(四) 活用の種類

語の活用の仕方の特徴に応じて整理、分類されたグループのこと。

(五) 用言と体言

用言 動詞、形容詞、形容動詞のこと。

体言 名詞のこと。

特に「活用形」と「活用の種類」を混同しやすいので、違いについて強調して説明し、徹底しておく必要がある。用語の定義をきちんと理解していないがゆえに定期考査で大きな失点をする生徒は非常に多い。

二・五 用言の活用

用言の活用については、よく教科書や文法のテキストに活用表の一覧などが出ているが、それを全て覚えるというのでは、生徒の負担感を軽減することにはならないし、「古典嫌い」をなくすことにはつながらない。日頃、私は活用表を全て覚えるのではなく、思い出せるようにさえすればよいと生徒には伝えている。以下、思い出すために必要な最小限の内容を示していきたい。

二・六 動詞

(一) 定義

活用する自立語で事物の存在や動作を表し、言い切るとウ段の音で終わる語を「動詞」という。ただし、ラ行変格活用の動詞は「り」で終わる。

(二) 活用と活用の種類

① 正格活用

左の活用表の中の「ア・イ・ウ・エ」には、活用する行の五十音表のそれぞれの段の音が入る。

また、活用の種類の名称は活用する五十音表の段とその数を示している。四段活用は「ア・イ・ウ・エ」の四つの段で、上二段は上の段イ段とウ段

# 文語文法用言の指導

Instruction of the grammar of a written language declinable word

浅田 勉

ASADA Tsutomu

## 一 はじめに

二〇二三年三月に定年退職するまで千葉県公立高等学校で三十八年間勤務した。最後の十四年間は行政職や管理職としての勤務となったが、それまでの二十四年間は、国語の教員として、白井高等学校、沼南高柳高等学校、船橋芝山高等学校で教壇に立った。その間、様々な工夫をしながら、実践を重ねたが、忙しさにかまけて実践報告としてまとめ、公にする機会がなかなかなかった。退職を機に明海大学教職課程センターに勤務し、教職課程の科目「教職基礎セミナーⅢ・Ⅳ」を中心として、将来国語の教員になることを目指す学生を指導することとなった。その中で、教員採用試験の専門教養対策のために高等学校の学びの復習として、文語文法を取り上げた。また、同時に、それは、将来国語の教員として教壇に立った時、どのように文語文法を指導したらよいか、具体的な実践例を若い国語教師の卵に経験者として示すことでもあった。このことに気付いた時、かつて高等学校の教壇に立って、誤解を恐れずに言えば、生徒の進路実現

のために必要な知識として文語文法の指導をしていた際には、ないがしろにし、重要視してもいかなかった授業実践を報告として取りまとめることの意義が見えてきた。実践報告として文章化することで、より確実に自分自身の取組を後進に伝えることができる。何も単純に手本としろというのはない。実践報告として残すことで、批判的に修正を加えるなどして、より優れた実践を行いやすくなるからだ。

高等学校の国語の教員にとつての普遍的な課題の一つとして、いわゆる「古典嫌い」をなくすためにはどうしたらよいかということがある。そして、「古典嫌い」を生む大きな要因として文語文法の学習があると言っても過言ではないだろう。それには、文語文法の学習に対する生徒の負担感の大きさ、学習の成果についての実感の薄さがあると考えられる。後者については、古典の学習の単元構成の中で学習の成果を強く実感させることができるような工夫をすることが必要となるが、これについて述べるのは別の機会に譲ることとして、本稿の目的とはしない。本稿では文語文法の学習に対する負担感をどう軽減するかに主眼を置いた文語文法の指導について述べていきたい。なお、今回は、用言の学習を中心に報告し、助動詞や助詞、敬語法の学習については、次回以降、報告することとしたい。

## 二 実践報告

### 二・一 実施した講義と対象学生

「教職基礎セミナーⅢ・Ⅳ」  
日本語学科二年の教職課程履修者十六名

### 二・二 想定される科目

高等学校「言語文化」